D 130　獅子舞の獅子に使われている繊維と染め ―沖縄本島の場合―

普天満宮　嘉陽妙子

目的　沖縄本島で行なわれている獅子舞の獅子は、どのような繊維で作られているか。染めは何でなされているかを知ると同時に、庶民の衣料繊維とのかかわりを考察する。

方法　6市村で、2ヶ所の保存された獅子と、6ヶ所の獅子舞を見て、責任者から聞き取りをした。庶民の戦前の衣料繊維については、北部地方で聞き取りを行った。文献資料も利用した。また、獅子舞フェスティバル、民俗芸能フェスティバルも見て参考にした。

結果　沖縄本島の場合、戦前の獅子舞の獅子の胴体の毛は、芭蕉の繊維を使っていた。戦後すぐの獅子は、フィリピンヅー（マニラ麻）のロープをほどいたものを使って作られていたが、芭蕉の繊維が入手できるようになると芭蕉に作り変えられた。現在では本土から取り寄せた麻を使って作っている所もある。

獅子の胴体を形づくっている紐は、戦前は棕梠縄で作るのが一般的であったが、現在は木綿のロープで作られている。

毛の色は、戦前は糸芭蕉の自然の色そのままか、シャリンバイで褐色に染めたものが使われていた。戦後は化学染料が使われるようになり、赤、黄、緑、紫、青、茶、黒など何色かに染めたものも出て来た。

耳は豚の皮、たてがみと尾は馬の毛を使用している。

これらのことから、獅子舞の獅子に使われている繊維は、時代によって変化し、染めも変化していることが分かる。それは、庶民の衣料繊維と染めの変化を反映しているものであると考えられる。